

⑥ 鷲見氏と東氏の関係は？

「濃北一覽」に阿千葉城にいた鷲見貞保を東常慶が滅ぼしたという記事があります。南北朝の時代には共に土岐氏に属して南朝方と戦った鷲見氏と東氏ですが、争いが起こったのです。その出典を捜すと「遠藤記」や「郡上古日記」が出てきます。それにしても濃北一覽は盛りすぎです。天文年間に鉄砲が出てくるのですから。以下「鷲見家史蹟」より。

『応仁・文明以後、鷲見郷には、鷲見彦六行保が居たのだが、自ら出陣して中央の戦いに加わることは無かったけれども、その子孫は多くの者が戦歴の無い者はなかった。行保に四人の男子があり伊豫守保照、美作守保重、大学助（だいがくのすけ）保兼及び新左衛門保房と言う。

伊豫守保照は庶子だったせいか家を継がず、又、鷲見城も一城だけでは戦国への備えが不十分だった為か、鷲見郷に入るべき関門である剣村に一城を築いて、ここに居た。永正十一年（一五一四年）伊豫守保照が亡くなり、その子の市兵衛貞保の時にあって、栗栖城くりすにいた東常慶と争いをして、天文十年（一五四一年）六月十八日貞保が遂に剣城で自害した。思うに東氏は、同年越前の朝倉氏と戦い、之を撃退しその余勢をかって鷲見郷の一角を取ったものであろう。「濃北一覽」にその戦いの記録が

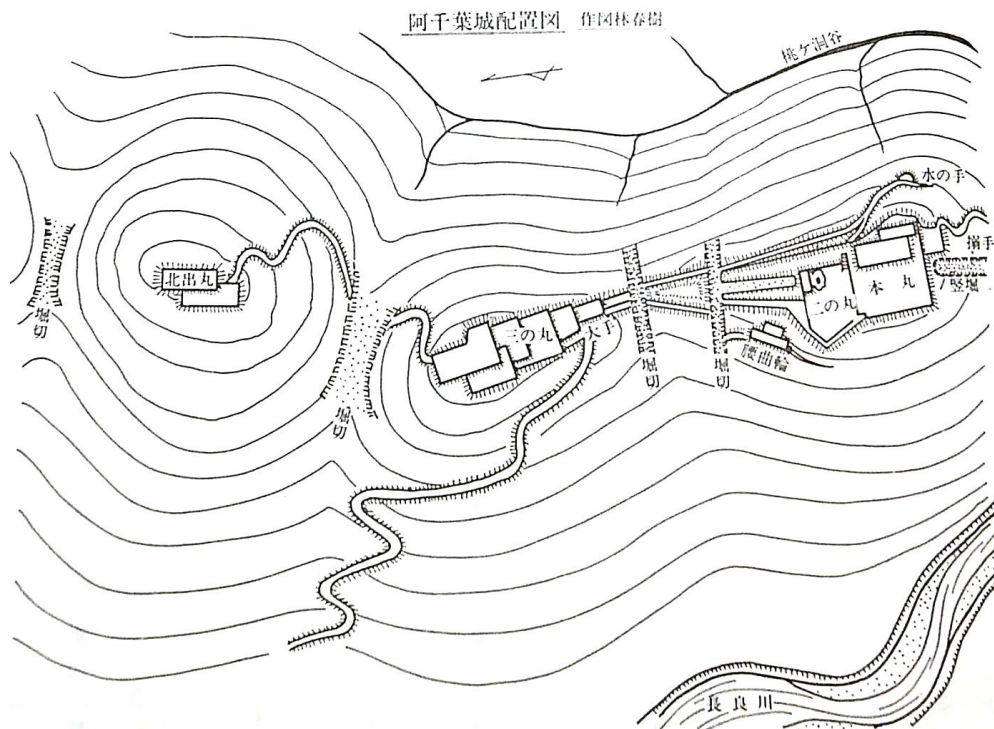
ある。

天文十年（一五四一年）栗栖篠脇しのわきの城主、東常慶、剣目城の鷲見市兵衛貞保を攻め滅ぼそうと軍勢を準備したことが鷲見家にもその由、聞き及んだので、手近な者達を集め、相談して軍の兵を用意した。

篠脇の城では早くも出陣を準備し、一番手に餌取肥後えとりひご、二番手に日置主計助かすえのすけ、三番手に松井縫殿助雑兵ぬいどのすけをたずさえ、剣の宮に陣を構えて八つの陣に備え立てた。城方には鷲見藏人くろうど、川尻備中びつちゅう、森左膳、大将の鷲見貞保、上段、下段と陣を構えて、今か今かと待っていた。

篠脇勢は正面から押し寄せたけれども、城方の者、鉄砲が霰（あられ）の様で近づけないので、夕方になるのを待って、池戸内記、遠藤唯右衛門、三木三十郎、各務、土屋等城の裏手より攻め寄せた。城兵等は死にもぐるいで防戦し、森左膳は突進して主計と戦い、共に討ち死にし、川尻備中も又、餌取肥後と戦って討死した。こうしている間に、からめ手の軍は城壁に迫って来たので、貞保は幼子の千代丸を老臣の餌取広綱ひろつなに託して遁れさせ、遂に自害し、鷲見藏人が介錯して共に自殺した。からめ手から乗り込んだ篠脇勢は城に火をつけたので城兵の大半は討たれ、逃げてしまった。

註として、その後、餌取広綱は千代丸と共に美濃国西牧谷へ落



『大嶋鷲見氏祖』

ち延び、千代丸が成長して後、信長公へ願い出、その時の八幡城主遠藤盛数へ使いを出し、鷲見が難儀をしているのでこちらで養育されるか、こちらで召し抱えるかどうか承りたいと申し出られたらば盛数公は早速、申請されて鷲見千代丸(後の兵助、鷲見正保)を家臣餌取広綱共々に大島村をつかわされた。

この「濃北一覽」の「阿千葉城の戦い」からいろいろな疑問が浮かびます。順番に考えてみましょう。

① この記事はそもそも正しいのか？

「郡上古日記」の東常慶の所に次のように書いてあります。

『天文の頃、阿千葉鷲見一族御下知に背き、討手として日置主計助、餌取肥後に仰せつけ、鷲見家来森某という者主計助を組討ちつかまつり、然れども肥後を始め味方の侍粉骨を尽くして早速攻め崩し、鷲見一家降参仕り、御旗下に罷り成り。』

これを見ると滅ぼされたとは書いてありません。降参して旗下に入ったと書いてあるだけです。しかも天文十年とは書いてないのです。

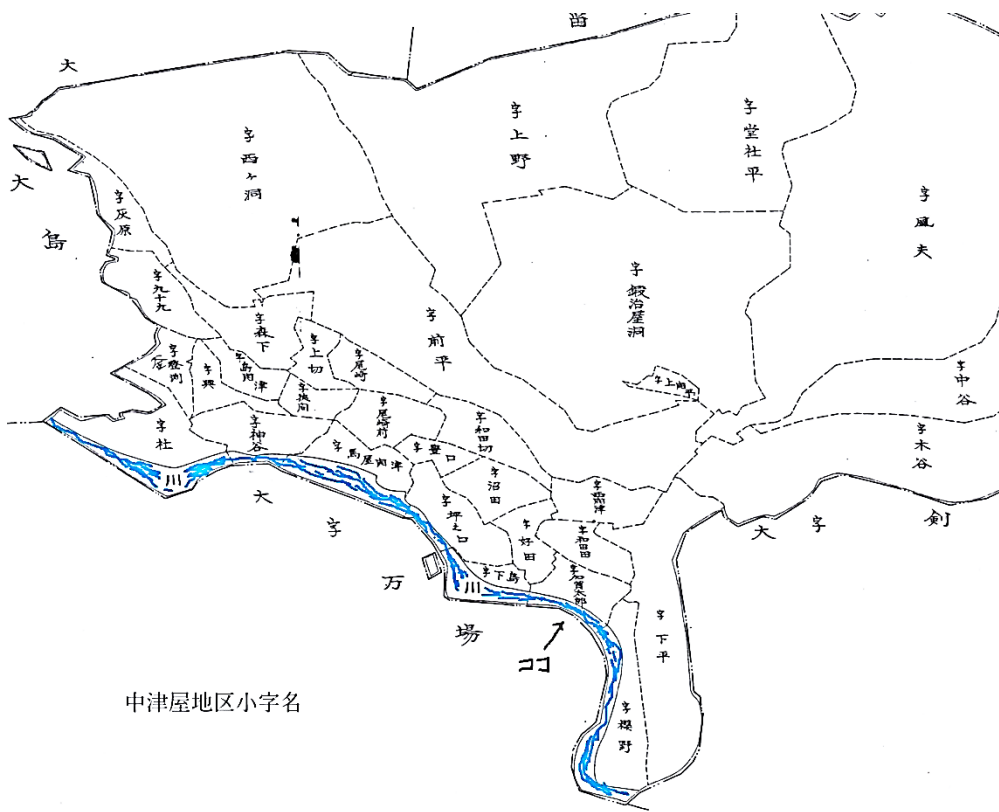
② そもそも鷲見氏がなぜ阿千葉城へ？

でも、肝心の鷲見氏がなぜ阿千葉城に来たのかはわかりません。そこで昔からの言い伝えを調べてみます。

「大中のかたりべ」に次のように書いてあります。

中津屋に「加賀太郎」という小字の地名があります。これは鷲見加賀丸(忠保の長男太郎論人)のことで、彼の屋敷があったというのです。あくまで言い伝えですが、地名に残っていて、

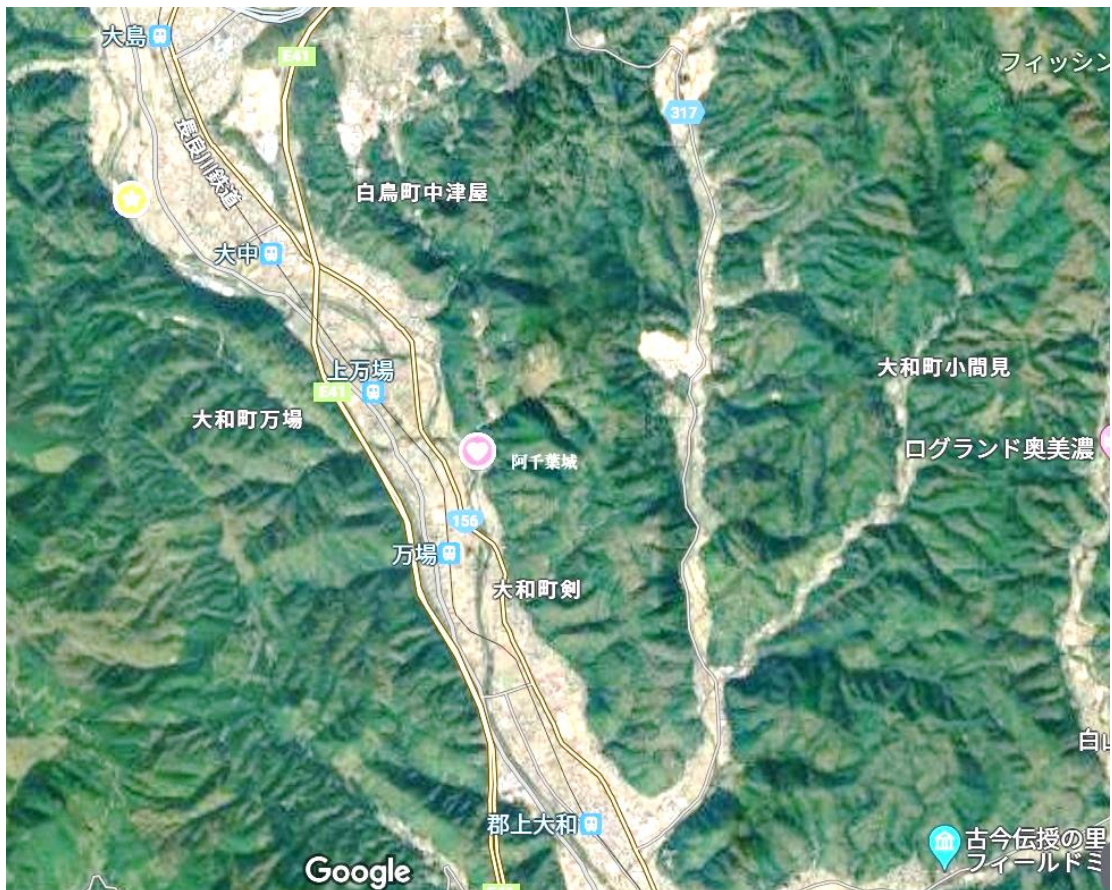
加賀丸の晩年出家してその屋敷から櫻野さくら野を通って阿千葉城に
 通ったという話があるのです。くだいですが剣つるぎではなく中津屋
 から阿千葉城へ通っていたのです。



中津屋地区小字名

中津屋の小字地図「大中のかたりべ」より

阿千葉城の位置
 グーグルマップより



③郡上目城とはどこの城？

長善寺文書の三頁に次のことばが載っています。

A、『郡上郡目城居住之仁者

東下総権守
しもふさごんのかみ

玉井三郎

鷺見藤三郎』

ここに出てくる目城はどこの城でしょうか？

B、目城は阿千葉城（森弘美文書）または千葉目城、剣目城

C、目城は鷺見城（鷺見度保文書）霞の城
のりやす かすみ

いずれも「郡上郡鷺見郷御領地嗣家譜」より

の二つが考えられます。しかし、最初に東氏が入っていることを考慮すると、B即ち阿千葉城に自然と落ち着きます。

藤三郎は鷺見忠保ですから、もう彼の時代に阿千葉城に入っていたと思われます。加賀丸はその息子ですから加賀丸が加賀太郎に隠棲したことは十分考えられます。

④鷺見氏は東家に早い段階から人質を出している

伝衛門家の系図を見ると、東家への人質となっているのが加賀丸の息子（弥兵衛）と氏保の息子（餌取八右衛門）がいるし、弥平治は稲葉家の人質になっています。当時人質に出すことは服属したということでした。

⑤なぜ天文一〇年なのか？

越前衆が天文九年に攻めてきたという記録が長龍寺文書の中にあります。山城の発掘によって、二日町城と篠脇城は越前衆に占領された証拠があります。それは越前だけに見られる畝状うねじょうに占領された証拠があります。それは越前だけに占領された証拠たてばり（白の目堀）があることです。「越前衆」の力が意外と大きかったことが予想されます。鷺見氏はこの時に、朝倉と関係があったことも考えられます。もちろん長龍寺と鷺見氏の関係は竹本坊を通じて親密な関係にありました。

『鷺見城は、明応三年（一四九四年）六月三十日行保が亡くなって後、三男大学助の保兼が城にいたが、保兼に跡継ぎの子がなく、美作守保重の子、保光が入って城を守った。

天正七年（一五七九年）保光が亡くなり、その子孫の多くは岐阜に出て、齊藤及び織田氏に仕えたので、鷺見城は保照の孫、鷺見兵庫保直が入って居城していた。鷺見兵庫は、遠藤盛数もりかずに従い、その子孫も又、遠藤氏に仕えた者が多かった。』

鷺見家史蹟より

『盛数公旗下の侍・・・』

牛道穴間…猪俣五平次、

鷺見の郷…鷺見兵庫、

大島村…鷺見兵助、・・・

胤俊公旗下の侍・・・

大間見郷…鷺見弥平次・・・』 「郡上古日記」より



中津屋の鷺見氏の五輪塔の墓。
阿千葉城の戦いで亡くなった人の墓だと言われている。
代々鷺見太郎左衛門家の方たちが守ってきた。

鷺見氏は滅んだわけではなく、鷺見郷や大島、大間見に生き残っていたのです。そして、戦国時代には日本各地に散らばります。鳥取、兵庫、岡山、長野、滋賀、千葉、・・・と各地へ、それぞれの来歴を背負いながら。

文責 上村文隆
令和六年正月

【参考文献】

- ・鷺見家史蹟（現代語訳版）
- ・濃北一覽 卷七「阿千葉城落城」
- ・長善寺文書原文 従足利將軍感状写 （長善寺文書）
- ・郡上古日記〈郡上東氏・遠藤氏の記録・岐阜県立図書館蔵〉
九頁と一一頁
- ・大中的かたりべ（加賀太郎）
- ・鷺見家系図（鷺見尚武氏所蔵）なのおたけ「鷺見伝衛門家系図」
- ・鷺見氏系図（森家所蔵）「森家文書鷺見氏系図」
- ・「郡上郡鷺見郷御領 地嗣家譜」